

組合員の利益を奪う組織分裂を許さない長野地本見解

JR 東労組長野地本は18春闘を大敗北であると総括し、新生 JR 東労組の旗の下、労働組合としての運動をこれまで推し進めてきた。多くの課題や問題を抱えながらも、組合員の声を第一にした活動を行い、組織拡大にも取り組んできた。

そのような中、水戸・東京・八王子地本の一部の職場で、新生 JR 東労組運動と決別するという不穏な動きがあるという話が聞こえてきた。

私たち長野地本は、この組織分裂策動を絶対に許すことは出来ない。なぜならば長野地本は過去の組織分裂により組織が弱体化してきたという歴史を持っているからに他ならない。

2007年の組織分裂により、長野地本の組織力は大きく弱体化をした。数だけを見れば一割程度の減であったが、その内実は組織の中枢を担っていた役員がほぼ脱退し、残されたのは役員経験の少ない一般の組合員だけであった。本部を中心とした関係組織の支援の下、部会・分科会、役員経験のある組合員を中心に組織が再建されたが、その足取りは困難を極めた。その理由として、それまでの組織指導の影響により現場には JR 東労組組織に対するアレルギーの様なものがあり、大きな不信感を持っていた。文字通り「ゼロ」からのスタートでなく「マイナス」からのスタートであった。現場に入っても僅かな組合員しか集まらず、そしてその組合員からも歓迎される事は無かった。あの時に感じた「先の見えない運動を続けていくことの虚しさ」「多くの組合員を残し新労組へ行った者たちへの怒り」「再建への見通しが描けない不安感」を私たちは忘れてはいない。

その後10年の時間を掛け、長野地本全組合員の奮闘で労働組合として再建を果たしてきたことは事実であるが、この間、組合員が本来得るべきであった利益と多くのかげがえのない時間を失ったことは、組織分裂が残した負の遺産である。その損失は計り知れない

「組織分裂で幸福になる者など誰もいない」私たちの大きな教訓である。これは組織を去った者、組織に残った者の両者に当てはまる。そしてこの問題は自分一人だけでは収まらず、家族に対しても大きな影響を及ぼすことは間違いない。

私たちは過去の歴史に学び、それを自らのものとし、活かしていくことの重要性を十分理解している。その重要性は、これまでの JR 東労組運動を通じて学んできた筈である。長野地本が歩んできた事実を他人事として捉え、組織分裂を画策する者は、過去の歴史に学ぶ重要性を全く理解していない。そのことは自らの力に奢り、過去の歴史に学ばない現政権と同じであり、組織分裂を画策する者たちは、それらを批判する資格すらない。

組織分裂を画策している者たちに伝えたい。JR 東労組と袂を分かち、その新組織に大勢の組合員が賛同すると思っているとすれば、それは大きな間違いである。13年前の長野地本組合員がそうであった様に、現場の組合員たちは自分たちが思っている以上に物事と情勢を分析し冷静に考えている。多くの組合員が新組織に加入するという目論見は誤った幻想である。

改めて考え直して欲しい。組織分裂の先にあるのは「明るく照らされた道」ではなく「真っ暗な茨の道」である。組織分裂という選択により多くの組合員とその家族が不幸になる。過去に私たちが歩んできた道を誰にも経験をさせたくはない。

今一度述べる。「組織分裂で幸福になる者など誰もいない」

私たちが守らなければならないのは「組合員の雇用」「労働条件の維持向上」「更なる賃金の引き上げ」である。組織分裂はこの事と相反するもので断じて認めるわけにはいかない。「誰のための労働組合なのか」を私たちは今一度考える必要がある。

長野地本は組合員の不利益となる組織分裂を断じて認めず、組織分裂を画策する者たちを許さないたたかいを全組合員でつくり出していくことを明らかにし見解とする。

2020年1月28日
東日本旅客鉄道労働組合
長野地方本部